

■ ドル/円のリバウンドは今しばらく続く！？

前回更新分の本欄で、ドル/円について「21年1月安値から今年10月高値までの上昇に対する38.2%押し=133.10円処から、今年8月初旬の安値=130.39円あたりのゾーンが(当座の)下値の目安」、「今後の戻りの目安は、一つに今回の日銀会合を受けて下げた分の半値戻し=134円処と見ておきたい」などと述べた。

実際、21日以降のドル/円は基本的に戻り歩調を辿っており、執筆時まで一時134円近くまでの戻りを試す場面も垣間見られている。

中国政府が入国時の隔離義務を1月8日に解除し、コロナの感染分類を引き下げると発表したことが、市場にリスク選好のムードをもたらしていることが一つには大きい。結果として米10年債利回りが3.8%台半ばあたりまで再浮上してきていることも見逃せず、さらに事前の市場予想よりも強めの米経済指標が少なからず確認されていることもドル買いを後押ししている。

また、一方では円を売り戻す動きも見られている。21日以降は、ユーロ/円をはじめクロス円全般が値を戻す動きとなっており、前回は述べたように、徐々に“正しい居場所”への水準訂正が進んでいると見ていいたろう。繰り返すも、12月の日銀サプライズに対する市場の初期反応は“少々行き過ぎ”であった。

当面の戻りの目安は、一つに前述した134円処と見られるが、同水準を上抜けると次に



21日移動平均線(21日線)、そして200日移動平均線(200日線)が意識されることとなりそうである(左図参照)。

いまだ200日線は上向きで推移していることから、少し長い目では同線を上抜ける動きとなってもおかしくはないと見る。その場合、目線は11月中旬から下旬にかけて下値を支えた140円あたりまで引き上がる可能性もあると個人的には考える。

少し長い目で見れば、2023年は円高方向に振れやすいと見られるが、その前に一旦リバウンドの動きが生じてもおかしくはない。12月の米連邦公開市場委員会(FOMC)が市場予想よりもタカ派寄りの印象であったことを、もう一度思い起こす必要があり、一時的にも少々低下し過ぎた米10年債利回りがもう少し強含みになってくる可能性も高いと見られる。

もちろん、欧州中央銀行(ECB)のタカ派姿勢を市場がどのように評価するかという点も重要ではある。今のところ、市場は「2月、3月のECB理事会においても0.5%ポイントの利上げを実施する」との見方を強めており、ユーロ/ドルに一定の上値余地があることは可能性として捨て切れない。

目先は、やはりユーロ/ドルが62週移動平均線と一目均衡表の週足「雲」下限をクリアに上抜けるかどうか焦点。むしろ、欧州のリセッション(景気後退局面)入りはもはや確実視されているわけで、年明け以降に市場のムードがガラリと変わる可能性もある。文字通り、ここは一つの正念場であり、市場が欧州の金利上昇と景気悪化のどちらに重きを置くこととなるのか慎重に見極めて行かねばなるまい。

(12月28日 11:00)